

性犯罪に関する最近の研究動向と 矯正施設における性犯罪再犯防止指導

浅野 正*

Recent research on sex offenses and education to prevent re-offending in correctional institutions

Tadashi ASANO

Recent research on sex offenses indicates that a deviant sexual interest is a characteristic of sex offenders that strongly predicts sexual recidivism. Research has also shown that anti-social tendencies are prevalent among sex and non-sex offenders and associated with sexual recidivism, violent recidivism, and other types of recidivism, while deficits in social skills, isolation, anxiety, and low self-esteem are important features of sex offenders possess but have little impact on recidivism. Findings from the current research suggest that the educational program to prevent re-offending by sex offenders in Japanese prisons should be improved. First, the prison staff ought to create a new course in which sex offenders learn how to control their deviant sexual interests. The new course should have as many sessions as the present self-management course because the course on deviant sexual interests is as important as the self-management course. Second, the educational staff in prison should implement the present self-management course to reduce anti-social tendencies as part of the educational program to prevent re-offending by sex offenders and also as part of other educational programs in prison. Third, the educational program to prevent re-offending by sex offenders should be re-organized and will consist of three courses, that is, a course on deviant sexual interests, a self-management course, and a new third course. Characteristics of sex offenders such as a deficit in social skills, isolation, anxiety, and low self-esteem will be improved by this new course.

Key words : sex offense, research review, education to prevent re-offending by sex offenders, correctional institution
性犯罪、研究動向、性犯罪再犯防止指導、矯正施設

I はじめに

刑務所などの矯正施設の運営を定めた明治時代からの監獄法が廃止され、新たに「刑事施設及び受刑者の処遇等に関する法律」が施行された

2006年頃に、矯正施設において性犯罪再犯防止指導が開始された。矯正施設では、性犯罪再犯防止指導の他、薬物依存離脱指導、暴力団離脱指導、被害者の視点を取り入れた教育、交通安全指導、就労支援指導などが行われており、受刑者は、それぞれの犯罪や問題性に応じて、いずれかのプログラムを受講する。性犯罪再犯防止指導は、性犯罪者処遇プログラムとも呼ばれる。同プログラム

* あさの ただし 文教大学人間科学部臨床心理学科

は認知行動療法を基礎とし、受刑者8名程度のグループワークを中心にして、問題性の程度に応じて3か月から8か月の期間継続される（性犯罪者処遇プログラム研究会, 2006）。また、全体としてオリエンテーション、本科、メンテナンスに分かれるが、本科は、自己統制（第1科）、認知の歪みと改善方法（第2科）、対人関係と社会的機能（第3科）、感情統制（第4科）、共感と被害者理解（第5科）の5単元から構成される。性犯罪者処遇プログラムを導入後は、データベースを活用して処遇効果を調べたり、海外の性犯罪者に関する実証研究を反映させながら、順次プログラム内容を改良していくものとされる。

2006年頃に矯正施設において犯罪再犯防止指導が導入されて以来、すでに数年が経過しており、その間海外で性犯罪に関する研究が数多く発表されている。その中の複数のメタ・アナリシスにより、性犯罪者の特性や、それと再犯との関係がかなりの確からしさを把握できるようになった。こうした海外の性犯罪に関する実証研究は、日本の矯正施設で実施されている性犯罪者処遇プログラムを改良し、再犯抑止効果を高める実践方法を考える上で、極めて貴重な情報を提供してくれる。本稿では、主として性犯罪再犯防止指導が導入されて以降に海外で発表された性犯罪に関する研究を概観し、最新の研究動向を紹介するとともに、それを矯正施設内での性犯罪者処遇プログラムの実施にどのように活用できるかを検討したい。

Ⅱ 性犯罪者の特性

矯正施設で性犯罪者の教育を行う際、まず知っておくべきことは性犯罪者の特性である。性犯罪以外の犯罪を行った者と比較して、性犯罪者がどのような特性を有するかについての知識があつて初めて、性犯罪再犯防止指導の内容を、薬物依存離脱指導や被害者の視点を取り入れた教育など他のプログラムと区別して考えることができる。性犯罪者の特性を知るための一般的な方法は、性犯罪者群と性犯罪でない犯罪者群との比較研究である。ただし1つの調査だけでは、複数ある特性の中の限られた部分しか調べられないし、それを性

犯罪者全体の特性として一般化していいかという疑問も残る（Freeman, Dexter-Mazza & Hoffman, 2005）。そのため、複数の研究論文を集めて分析し、包括的で一般的な特性を抽出することを目指すメタ・アナリシスが行われる。メタ・アナリシスの中にも、統計的な処理を行わないものもあるが、性犯罪群と非性犯罪群の比較研究は結果が異なることが多いため、結局性犯罪者に特有の傾向はあまりないのではないかという結論になることもある（Wijk et al., 2006）。一方で、収集したすべての研究について効果値を算出するという統計処理を行った2つのメタ・アナリシスが最近発表され、性犯罪者の幅広い特性がかなりの確からしさで特定できるようになっている。ここでは、主にその2つの論文に沿って、性犯罪者の特性を概観したい。

最初に紹介するのは、Seto and Lalumiere(2010)によるメタ・アナリシスである。この論文では、12歳から18歳までの青少年を対象とし、性非行群と性非行以外の非行少年群とを比較した59の先行研究を分析して、一般的な非行の危険因子、児童虐待、家族関係の領域、対人関係の領域、性の領域、精神病理、認知的側面の7つの領域ごとに効果値をまとめている。効果値の大きさに応じて、両群の差が大きい（large）、中程度（medium）、小さい（small）の3つに区分して、性非行群の特徴の1つ1つがどの程度強いものであるかを量的に示している。

最も強い特徴が表れたのが、性の領域である。逸脱した性的な空想、行動、関心が、すべての効果値の中で最も高い値を示した。また性やポルノグラフィーへの接触が、小さいながらも性非行群と非性非行群とで統計上有意な差を示した。一方で、反社会的性格傾向や、反社会的な態度や信念については、有意な差は認められなかった。

性の領域に続いて強い特徴が表れたのが、児童虐待の領域である。中でも性的虐待の経験は、性的な空想、行動、関心と同程度の高い効果値となっている。これは性非行群が、性非行ではない非行を行った群と比較して、広く性的虐待を経験していることを示す。性的虐待の他、身体的虐待、情緒的虐待やネグレクト、家族内の性的暴力の存在

も、小さい程度ではあるが有意な差として表れており、性非行少年が様々な種類の児童虐待を経験していることがうかがえる。一方で、家族関係の問題、家族内でのコミュニケーションや満足感、幼少期の愛着、両親の離婚、親との別居や離別などは、両群で有意な差はみられなかった。

続いて目立った特徴があったのは、一般的な非行の危険因子の領域である。性非行少年はそれ以外の非行少年と比較して、非行の経歴が少なく、反社会的な交友関係があまり広がっておらず、薬物乱用も少ないことが示された。その他、対人関係の領域では、未熟な社会的関係、孤独や孤立、引きこもり、内向性に、また精神病理の領域では、不安の強さと低い自己評価に非行少年の特性が表れた。一方で、社会的スキルの欠損や、異性と適切にかかわる能力の欠損については、性非行群と非性非行群との間に差は認められなかった。

次に紹介するのは、Whitaker et al. (2008) によるメタ・アナリシスである。1990年から2003年までに出版された89の先行研究を分析し、被害者が子どもである性犯罪者群を、被害者が成人である性犯罪者群、性犯罪以外の犯罪者群、犯罪歴のない健常者群の3群と比較をしている。89研究のうち4分の3程度で研究対象となる加害者が成人であり、非行少年のみを扱ったSeto and Lalumiere (2010) による研究とは加害者の年齢層が異なる。ここでは上記3群との比較のうち、被害者が子どもである性犯罪者と、性犯罪以外の犯罪者群との比較に限って概観したい。

まず性の領域に、性犯罪者の特徴がはっきり表れている。性について外在化された問題、高い性衝動や性への没入、逸脱した性的関心、性的なコーピングのいずれも、子どもを対象にした性犯罪者は、性犯罪以外の犯罪者と比較して、有意に高い効果値を示している。この点は、Seto and Lalumiere (2010) による研究とほぼ同じ結論である。一方で、子どもへの性犯罪者は、性犯罪以外の犯罪者よりも、不安定な生活スタイルがあまりみられず、衝動性は低く、反社会的人格障害も少ないとの結果となっている。

児童虐待については、性的虐待は中程度を超える、また身体的虐待は中程度の効果値となってお

り、子どもに被害を加えた主に成人の性犯罪者が、性非行を行った少年と同様に、幼少期に広く虐待を経験していることがうかがえる。ここで紹介している2つのメタ・アナリシスとは別のメタ・アナリシスで、被害者を子どもに限定せず、子どもの被害者と成人の被害者の両方の群を含めた成人の性犯罪者の間で、性犯罪ではない犯罪者よりも性的虐待の経歴が広くみられることを確認した研究もある (Jespersen, Lalumiere & Seto, 2009)。性的虐待の経歴は、被害者と加害者が未成年であれ成人であれ、あらゆる性犯罪者の共通する特徴といえる。一方で児童虐待以外では、Seto and Lalumiere (2010) による研究と同様、家族機能には両群で有意な差は認められなかった。

その他にSeto and Lalumiere (2010) による研究と概ね結論が一致する性犯罪者の特徴として、不安の強さ、低い自己評価、孤独感の強さ、親密な関係を築くことの困難などがある。また2つのメタ・アナリシスで結果が異なるものとしては、Seto and Lalumiere (2010) による研究では、異性と適切にかかわる能力や一般的な社会的スキルの欠損が、性非行少年の特性として認められなかったが、Whitaker et al. (2008) による研究では、子どもを対象とした性犯罪者は、性犯罪以外の犯罪者と比較して、社会的スキルの欠損が中程度の効果値として示されている。これら2つのメタ・アナリシスとは別のメタ・アナリシスで、性犯罪者群と性犯罪以外の犯罪者群との比較において、性犯罪者群の方が異性と適切にかかわる能力が低かったことが報告されている (Dreznick, 2003)。この研究の対象は主として成人の加害者である。社会的スキルや異性と適切にかかわる能力の欠如は、未成年の性非行少年よりも、成人の性犯罪者に表れる特性なのかもしれない。さらに、犯罪をしていない一般人を対照群としている点で、性犯罪以外の犯罪者や非行少年を対照群としている上記の3つのメタ・アナリシスとは異なるが、性犯罪者は一般人と比較して社会的スキルが低いことを確認した別のメタ・アナリシスもある (Emmers-Sommer et al., 2004)。

Ⅲ 性犯罪者の特性と再犯との関係

性犯罪再犯防止指導の内容を考える上で、性犯罪者の特性を知ることにより必要なことは、それぞれの特性が再犯と関係するのかわからないのか、その特性を強く有するほど再犯罪を起こしやすいといえるのかどうかという点である。性犯罪者の特性と再犯の関係を調べたメタ・アナリシスにHanson and Morton-Bourgon (2005)の研究がある。この論文では、性犯罪者が矯正施設を出所した後、再犯に及んだ群と再犯に至っていない群に分け、両群間で特性を比較した82研究を分析している。そのうち15研究は、未成年の性非行少年を対象としている。ある特性を有する程度が、再犯に至っていない群と比較して、再犯に及んだ群が強ければ、その特性は再犯と関係するといえる。その特性を強く有する性犯罪者ほど、再犯罪を起こしやすいともいえる。再犯罪者群と非再犯罪者群との差は、前に紹介したSeto and Lalumiere (2010)やWhitaker et al. (2008)と同様の効果値によって示されている。効果値を大きい(large)、中程度(medium)、小さい(small)の3つに区分して、性犯罪者の特性と再犯との関係の強さを量的に示している点も、これまでに紹介した他のメタ・アナリシスと同様である。特性については性的逸脱、反社会的傾向、性的態度、親密さの欠如、劣悪な生育環境、一般的な精神病理の問題、その他の7つの領域に、再犯罪については性犯罪、性犯罪ではない暴力犯罪、性犯罪を含む暴力犯罪、その他の一般犯罪の4種類に分けて分析している。

7つの領域のうち性犯罪の再犯について最も高い効果値が表れたのは、性的逸脱である。逸脱した性的関心や性への没入など直接性に関係する特性が、性犯罪の再犯に最も強く関係するといえる。一方で、性的逸脱は、性犯罪ではない暴力犯罪やその他の一般犯罪とは有意な関係が認められなかった。

性犯罪の再犯について、性的逸脱に次いで高い効果値となったのは、反社会的傾向である。反社会的傾向は、性犯罪の再犯だけではなく、性犯罪

ではない暴力犯罪、性犯罪を含む暴力犯罪、その他の一般犯罪についても中程度の効果値となっている。反社会的性格、サイコパス、違法行為の経歴、自己統制力の問題、就労の不安定さ、敵意などは性犯罪に限らず、あらゆる犯罪の重要な予測因子である。こうした反社会的傾向を強く有するほど、性犯罪に限らずあらゆる犯罪を起こしやすいといえる。

Hanson and Morton-Bourgon (2005)の研究は成人と少年を一緒にして分析しているが、未成年の性非行少年のみに分析対象を限定した別のメタ・アナリシスもあり、そこでも性的逸脱と反社会的傾向が性非行の再犯の有力な予測因子となった(McCann & Lussier, 2008)。また、未成年の性非行少年に限定したさらに別の研究でも、反社会的傾向は性犯罪の再犯とも、性犯罪以外の犯罪の再犯とも、両方の再犯に関連した(Parks & Bard, 2006)。性的逸脱は特に性犯罪の、反社会的傾向は性犯罪だけではなくあらゆる犯罪の予測因子となるとするHanson and Morton-Bourgon (2005)の結論は、そのまま非行少年にもあてはまると考えられる。

ただし注意しなければならないのは、Hanson and Morton-Bourgon (2005)のメタ・アナリシスにおいて、反社会的傾向はどちらかというと性犯罪の再犯よりも、性犯罪以外の暴力犯罪や性犯罪を含む暴力犯罪の再犯との関連の方が強いという点である。したがって、メタ・アナリシスではない研究においては、反社会的特徴が暴力犯罪の再犯とは関連するが、性犯罪の再犯との関連は統計上有意な差として表れないということがある(Boccaccini, Murrie, Hawes, Simpler & Johnson, 2010; Dietrich, Smiley & Frederick, 2007)。また、反社会的パーソナリティが教育や治療の中断の重要な予測因子となることを示した研究もあり、反社会的傾向がどのようにして再犯につながるのかを理解する手掛かりになる(Larochelle, Diguier, Laverdiere & Greenman, 2011)。

性的逸脱や反社会的傾向とは別の領域に関して、まず劣悪な生育環境の領域では性的虐待やネグレクト、その他の虐待と性犯罪の再犯との関係はほとんど認められなかった。また親密な関係を

築くことの困難が、小さい程度から中程度の効果値を示す一方で、社会的スキルの欠陥、孤独感、低い自己評価には統計上有意な関連はみられなかった。この結果は、児童虐待の経歴があっても、そのことが性犯罪の再犯と関連するということはほとんどないし、社会的スキルや自己評価が低く孤独感が強くても、その傾向が顕著であるほど再度性犯罪に至りやすいとはいえないということを意味している。性犯罪の再犯とは別の、性犯罪ではない暴力犯罪、性犯罪を含む暴力犯罪、その他の一般犯罪の再犯との関連も全くないか、あってもごく小さな程度であり、反社会的傾向があらゆる犯罪の予測因子となるのとは対照的である。

IV 性犯罪再犯防止指導の改善に向けて

先に説明したように、現在矯正施設で実施されている性犯罪再犯防止指導は2006年頃に導入されたものであるが、海外の実証研究から得られる知見を反映させながらプログラム内容を順次改良していくものとされている。最近の実証研究で特に目を引くのはこれまでに紹介してきた複数のメタ・アナリシスであり、それらにより性犯罪者の特性がかなりの確からしさで特定できるようになり、さらにその特性を強く有するほど再犯罪を起こしやすいといえるのかどうかという点もかなりの正確さで把握できるようになった。ここではこうした知見を踏まえながら、性犯罪再犯防止指導にどのような改善が望まれるか、あるいは大きな改善をしないまでも、スタッフがプログラムを実施するにあたってどのような点に配慮する必要があるのかを考えてい。

最も重要なことは、再犯リスクの大きい性犯罪者の特性にターゲットを当てるという点である。それにより、性犯罪の再犯を低減させるという性犯罪再犯防止指導の目的が効果的に実現できる。まず注目すべき点は、性に関する特性である。Seto and Lalumiere (2010) の研究では、逸脱した性的な空想、行動、関心やポルノグラフィーへの接触が性非行群の特徴として、Whitaker et al. (2008) によるメタ・アナリシスでは、性について外在化された問題、高い性衝動や性への没

入、逸脱した性的関心、性的なコーピングが子どもを対象とした性犯罪者の特徴として示された。さらにHanson and Morton-Bourgon (2005) の研究では、逸脱した性的関心や性への没入など直接性に関係する特性が、性犯罪の再犯を最も強く予測していた。

性に関する特性こそ最も再犯リスクの大きい性犯罪者の特性であり、性犯罪再犯防止指導の中心に位置づけるべきであろう。性の問題の改善を直接目指した指導の一例として、カナダで実際に行われた嫌悪条件付けの原理を用いた方法がある。87名の性非行少年に対し、逸脱した性的空想が生じたとき、警官に取り押さえられるとか、逸脱行動が人目につくようになるとか、少年院のドアロックの音がするなどの嫌悪感を伴う考えやイメージを呼び起こすような心理療法を行ったところ、逸脱した性的空想が生じて嫌悪感のある考えにより妨害を受け空想が止まるようになり、12か月のプログラムの終了時には逸脱した性的空想が生じても全体の70%程度の場合ですぐに止まるようになったことが報告されている (Aylwin, Reddon & Burke, 2005)。日本の性犯罪再犯防止指導でも、この例のように逸脱した性的空想や関心の直接の変容を促したり、それに対する対処法を身に付けるための指導が望まれる。現在の性犯罪再犯防止指導は、自己統制 (第1科)、認知の歪みと改善方法 (第2科)、対人関係と社会的機能 (第3科)、感情統制 (第4科)、共感と被害者理解 (第5科) の5単元から構成されている。第2科から第5科までは、それぞれ10セッション程度だが、第1科の自己統制だけは26セッションをかけるなど、自己統制がプログラムの中心となっている。最近の実証研究を踏まえてのプログラムの改善案として第一に考えられるのは、逸脱した性的空想や関心など性の領域を直接の内容とする科を新設し、自己統制と同じ程度のセッション数とし、この新しい科を自己統制と並ぶプログラムの柱にするという方法である。あるいは、現在と同じプログラム構成のままであっても、指導にたずさわるスタッフが再犯につながりやすい性犯罪者の特性という観点から性の領域が最も重要であることを理解し、すべての科でまず性の問題を扱う

という運用面での工夫や配慮により対処することも可能である。いずれの方法でも性に直接関係する性犯罪者の特性を他の特性よりも優先し重点的に指導することが重要である。

第二にプログラムの改善案として考えられるのは、性犯罪再犯防止指導の第1科で行われている自己統制を、性犯罪再犯防止指導だけではなく、薬物依存離脱指導、被害者の視点を取り入れた教育、暴力団離脱指導、交通安全指導、就労支援指導といった他のプログラムでも実施するという点である。Hanson and Morton-Bourgon (2005)によるメタ・アナリシスでは、性犯罪の再犯について、反社会的傾向が性的逸脱に次ぐ高い効果値となって表れた。反社会的性格、サイコパス、違法行為の経歴、自己統制力の問題、就労の不安定さ、敵意などは、性的逸脱と並ぶ性犯罪の重要な予測因子といえる。したがって、反社会的傾向の改善を目指した第1科の自己統制が他の科よりもセッション数が多く、性犯罪再犯防止指導の中心となっている現在のプログラム構成は適切といえる。

しかし、反社会的傾向は性的逸脱と異なり、性犯罪の再犯だけではなく、性犯罪ではない暴力犯罪、性犯罪を含む暴力犯罪、その他の一般犯罪の再犯とも関連していた。つまり反社会的傾向は、性犯罪に限定したものではなく、性犯罪も含むあらゆる犯罪と関連し、それらを予測する再犯リスクといえる。また性犯罪者が、それ以外の犯罪者と比較して、反社会的傾向が強いともいえない。Seto and Lalumiere (2010)によるメタ・アナリシスでは、性非行少年と性非行ではない非行少年とを比べて、反社会的性格傾向や、反社会的な態度や信念については両群で差がなかったし、性非行少年の方が非行の経歴が少なく、反社会的な交友関係は広がらず、薬物乱用も少なかった。Whitaker et al. (2008)によるメタ・アナリシスでは、子どもへの性犯罪者は、不安定な生活スタイルがあまりみられず、衝動性は低く、反社会的な人格障害も少なかった。これらの研究からは、性犯罪者が特に反社会的傾向が強いとはいえないばかりか、もしかすると反社会的傾向が少ないことが、性犯罪者の特性といえるような可能性すらある。反社会的傾向がある犯罪者が、必ずしも性犯

罪再犯防止指導の対象者とならず、別のプログラムに編入され、性犯罪に限らずあらゆる犯罪の再犯リスクを有していることを考えると、反社会的傾向の改善を目的とした第1科の自己統制とほとんど同じ内容のセッションを、性犯罪再犯防止指導だけではなく、薬物依存離脱指導や被害者の視点を取り入れた教育などの別のプログラムでも行うことが適切と思われる。つまり自己統制は、すべてのプログラムに共通するセッションとしてほぼ同一のものをどのプログラムでも実施するという形が望ましい。ただし、こうしたプログラムの大きな改変を行わないにしても、実際に犯罪者の教育を担当しているスタッフが、反社会的傾向を有する犯罪者は性犯罪者以外にも広く存在していることを念頭に置き、性犯罪再犯防止指導における自己統制のセッションと同じような指導を、現在のプログラム構成を大きく変えない範囲で、薬物依存離脱指導や被害者の視点を取り入れた教育などの別のプログラムでも取り入れるという方法もある。

第三のプログラム改善策は、性犯罪再犯防止指導の5単元のうち、認知の歪みと改善方法、対人関係と社会的機能、感情統制など、自己統制以外の科については、1つの科としてまとめるというものである。つまり、性の領域を扱う科と反社会的傾向の改善を目指した自己統制の科と、主としてそれ以外を指導内容とした科との大きく3単元とする。そして最後の科において、Seto and Lalumiere (2010)によって性非行少年の特性として示された、性的虐待、身体的虐待、情緒的虐待やネグレクト、家族内の性的暴力の存在など、家族内の児童虐待の問題や、未熟な社会的関係、孤独や孤立、引きこもり、内向性、不安の強さ、低い自己評価など対人関係や精神病理の特徴、およびWhitaker et al. (2008)によって指摘された、性的虐待や身体的虐待、不安の強さ、低い自己評価、孤独感の強さ、親密な関係を築くことの困難、社会的スキルの欠損などといった性犯罪者の特性を取り扱うことにする。児童虐待の問題と、孤独感の強さや社会的スキルなどの対人関係の問題、および不安の強さや低い自己評価といった心理面の問題は、それぞれが無関係に独立した特性とい

うわけではなく、相互につながりを持っている。例えばManiglio (2011,2012) は、児童虐待の経験が影響して、性犯罪者は他者と親密な関係を築くことができず、社会的スキルに支障があり、孤独感や不安を抱きやすく、そうした自分に自信を持てないという理解をしている。そして、実生活の中では実現できない他者との親密さや、代償的な自己評価の回復を求めて、逸脱した性的空想に没頭する傾向があるという。このような、児童虐待と対人関係や心理面での問題、さらには逸脱した性的空想との関連は、性的内容を伴った殺人者7名の事例分析の中でも確認されたとしている (Maniglio, 2010)。Seto and Lalumiere (2010) とWhitaker et al. (2008) のメタ・アナリシスで抽出された上記の性犯罪者の特性については、複数の科で別々のものとしてではなく、1つの科の中で相互の関連性に着目しながら1つのまとまったものとして取り扱うことが望ましい。

その際注意が必要なのは、児童虐待、対人スキル、心理的問題などは、性犯罪の再犯とは直接にはあまり関係がないという点である。先に紹介したHanson and Morton-Bourgon (2005) の研究によると、親密な関係を築くことの困難と性犯罪の再犯との関係はある程度認められたものの、性的虐待やネグレクト、その他の虐待、および社会的スキルの欠陥、孤独感、低い自己評価には再犯との間で統計的に有意な関連はみられず、これらの特徴が強いほど再犯に至りやすいとは結論付けられなかった。しかし複数の研究から、これらの特性は、性犯罪の再犯と関係のある別の特性、すなわち逸脱した性的関心や反社会的傾向と関連があることが知られている。したがって、実際の性犯罪再犯防止指導では、児童虐待の経験に起源があると思われる、孤独感の強さ、社会的スキルの欠損、不安の強さ、低い自己評価などといった性犯罪者の特性がどのようにして逸脱した性的関心や反社会的傾向につながるのかという点に着目し、最終的には逸脱した性的空想に対する適応的な対処法を身に付けたり、反社会的傾向を減少させることが大切である。対人関係や心理面での問題を改善するだけでは再犯抑止につながらない。その指導を通して、最終的には性に直接関係する

問題や反社会的傾向が改善されて初めて、性犯罪の再犯の減少が期待できる。その意味で、現在の性犯罪プログラムの5単元のうち、認知の歪みと改善方法、対人関係と社会的機能、感情統制などを1つにまとめた科は、性の領域を扱う科と反社会的傾向の改善を目指した自己統制の科と内容的につながりを持たせることが望ましい。

児童虐待と性的空想との関係、および児童虐待と反社会的パーソナリティとの関連は複数の研究で確認されている。例えば、Grabell and Knight (2009) によると、193名の性非行少年を対象として、性的虐待については頻度、期間、強度、加害者の人数といった視点から、性的空想については性的衝動、性的没入、性的行動の3つを構成要素としてそれぞれの関係を調べたところ、別の年齢に比べると特に3歳から7歳までの性的虐待の経歴が最も強く性的空想と関連していた。Graham, Kimonis, Wasserman and Kline (2011) による223名の成人の性犯罪者を対象にした研究では、児童虐待の経歴は、サイコパスを測定するPCL-Rの下位尺度の中の1つで、衝動性、無責任、退屈しやすさ、易刺激性を反映するライフスタイルとの間で関連がみられた。さらにその関連性は、児童虐待の中でも性的虐待との間で最も強く、身体的虐待やネグレクトについては、PCL-Rの別の下位尺度であり、過去の犯罪歴を含む反社会的行動との間に顕著な関連が認められた。

またこのような児童虐待に関する研究とは別に、性犯罪者の特性である孤独感に注目し、性的空想や反社会的特徴との関連を調べた研究もある。心理検査の1つであるMMPIを用いての研究では、228名の成人の性犯罪者の中でも、特に逸脱した性的空想が顕著であるグループにおいて、MMPIの下位項目である社会的疎外感、情緒的疎外感、自己の疎外感の得点が高くなった (Curnoe & Langevin, 2002)。また、66名の性非行少年に対して標準化された尺度を実施して、孤独感、敵意、逸脱した性的空想の関連を調べた研究では、孤独感と敵意の間に有意な相関が、さらに敵意と逸脱した性的空想の間に有意な相関関係が認められた (Digiorgio-Miller, 2007)。性的空想と情緒の関係、および性的空想とパーソナリティの関係

を取り上げた研究については、Bartels and Gannon (2011) が詳しくレビューしている。

性犯罪再犯防止指導の5単元のうち、自己統制以外の複数の科を1つにまとめた科を、性に関係する科や自己統制の科と内容的につながりを持たせることに加え、実際に性犯罪再犯防止指導を行う際には、性の領域に関する科と反社会的傾向を扱う自己統制の科との関連にも着目する必要がある。それは、逸脱した性的空想と反社会的傾向との関連が複数の研究で指摘されているためである。例えば、サイコパスの特徴を有する性犯罪者は、その特徴の見られない性犯罪者に比べて、性的空想を抱く回数が多いことを示した研究がある (Skovran, Huss & Scalora, 2010)。また、性犯罪者ではなく大学生に対しての質問紙調査ではあるが、サイコパスの傾向が強いグループでは、逸脱した性的空想が逸脱した性的行動に影響する一方で、サイコパスの傾向が弱いグループではその影響はなく、サイコパスの存在が逸脱した性的空想と逸脱した性的行動の媒介になっていると結論付けている (Williams, Cooper, Howell, Yuille & Paulhus, 2009)。反社会的傾向とは必ずしも一致しないが、過去の犯罪歴等から予測される再犯リスクが高い性犯罪者について、再犯リスクが低い性犯罪者と比較して、ポルノグラフィの使用頻度が特に暴力犯罪の再犯につながることを示した研究がある (Kingston, Fedoroff, Firestone, Curry & Bradford, 2008)。

V 結び

本稿では、性犯罪に関する比較的新しい研究を紹介しながら、現在矯正施設で実施されている性犯罪再犯防止指導の改善策を示した。最近発表された複数のメタ・アナリシスにより、逸脱した性的関心が再犯リスクの高い性犯罪者の特性であること、反社会的傾向は性犯罪者に特に強いとはいえないが、性犯罪を含むあらゆる種類の犯罪の予測因子になること、児童虐待、対人スキルの欠損、孤独感の強さ、不安の強さ、低い自己評価などが性犯罪者の特性として確認されたが、それらは直接にはあまり再犯と関連しないことなどが示され

た。ただしメタ・アナリシスではないが、別の複数の研究において、児童虐待や、対人面および心理面の問題は、逸脱した性的関心や反社会的傾向と関連することが示された。こうした最近の研究から得られる知見を基にして、本稿で示した性犯罪再犯防止指導の改良点は、第一に逸脱した性的空想や関心など性の領域を直接の内容とする科を新設し、この新しい科を、現在性犯罪再犯防止指導の第1科で行われている自己統制と並ぶプログラムの柱にすること、第二に反社会的傾向の改善を目的とする第1科の自己統制を、性犯罪再犯防止指導だけではなく、薬物依存離脱指導や被害者の視点を取り入れた教育など他のプログラムでも実施すること、第三に現在5単元で構成されている性犯罪再犯防止指導を、性の領域を扱う科と自己統制に関する科と、それ以外を内容とする科の3単元とし、児童虐待や、対人面および心理面における性犯罪者の特性は最後の科で取り扱うことである。ただし、現在と基本的なプログラム構成を変えないままであっても、性犯罪者の教育を担当するスタッフが運用面で工夫や配慮をすることにより、最近の研究から得られる知見を適切な形でプログラムの中に取り入れていくことは十分可能である。

今後は、性犯罪者の特性の相互関連に着目した研究が増えることが期待される。先に紹介したように、Maniglio (2010, 2011, 2012) によると、性犯罪者は児童虐待を経験したことで、他者と親密な関係が築けず、孤独感、不安、自信のなさを感じやすく、逸脱した性的空想の中に代償的な満足を求めるという。つまりここでは、児童虐待、未熟な社会的関係、社会的スキルの不足、孤独や孤立、不安の強さ、低い自己評価などの性犯罪者の特性を、別々の独立したものではなく、つながりを持つ1つのまとまったものとして理解しようとしている。そしてそのつながりを、性的内容を伴った殺人者7名の事例分析の中で確かめているが、あくまで質的な研究であり、信頼性や妥当性が確認されたデータで実証的に調べられたわけではない。またさきほど紹介したように、児童虐待、孤独感、性的空想、反社会的特徴の関連を調べた研究はあるが、性犯罪者の特性の一部の関連を調

べたにすぎない。Seto and Lalumiere (2010) および Whitaker et al. (2008) のメタ・アナリシスによって示された性犯罪者の特性は多く、その組み合わせを考えるとかなりの数になる。今後は、性犯罪者の複数の特性を組み合わせ、その相互関連を分析した研究が増えていくことが望まれる。そして研究の蓄積が十分になれば、性犯罪者の特性の相互関連に関するメタ・アナリシスが行われることだろう。最近発表された性犯罪者の特性についてのメタ・アナリシス、性犯罪者の特性と再犯との関係についてのメタ・アナリシスに続いて、将来性犯罪者の特性の相互関連についてのメタ・アナリシスが行われれば、そこで得られた知見は、矯正施設での性犯罪再犯防止指導の実践に大いに役立つものと期待される。

References

- Aylwin, A.S., Reddon, J.R., & Burke, A.R. (2005). Sexual fantasies of adolescent male sex offenders in residential treatment: A descriptive study. *Archives of Sexual Behavior*, 34(2), 231-239.
- Bartels, R.M., & Gannon, T.A. (2011). Understanding the sexual fantasies of sex offenders and their correlates. *Aggression and Violent Behavior*, 16, 551-561.
- Boccaccini, M.T., Murrie, D.C., Hawes, S.W., Simpler, A., & Johnson, J. (2010). Predicting recidivism with the personality assessment inventory in a sample of sex offenders screened for civil commitment as sexually violent predators. *Psychological Assessment*, 22(1), 142-148.
- Curnoe, S., & Langevin, R. (2002). Personality and deviant sexual fantasies: An examination of the MMPIs of sex offenders. *Journal of Clinical Psychology*, 58(7), 803-815.
- Dietrich, A.M., Smiley, W.C., & Frederick, C. (2007). The roles of childhood maltreatment and psychopathy in sexual recidivism of treated sex offenders. *Journal of Aggression, Maltreatment & Trauma*, 14(3), 19-31.
- Digiorgio-Miller, J. (2007). Emotional variables and deviant sexual fantasies in adolescent sex offenders. *The Journal of Psychiatry & Law*, 35, 109-124.
- Dreznick, M.T. (2003). Heterosocial competence of rapists and child molesters: A meta-analysis. *The Journal of Sex Research*, 40(2), 170-178.
- Emmers-Sommer, T.M., Allen, M., Bourhis, J., Sahlstein, E., Laskowski, K., Falato, W.L., et al. (2004). A meta-analysis of the relationship between social skills and sexual offenders. *Communication Reports*, 17(1), 1-10.
- Freeman, K.A., Dexter-Mazza, E.T., & Hoffman, K.C. (2005). Comparing personality characteristics of juvenile sex offenders and non-sex offending delinquent peers: A preliminary investigation. *Sexual Abuse: A Journal of Research and Treatment*, 17(1), 3-12.
- Grabell, A.S., & Knight, R.A. (2009). Examining childhood abuse patterns and sensitive periods in juvenile sexual offenders. *Sexual Abuse: A Journal of Research and Treatment*, 21(2), 208-222.
- Graham, N., Kimonis, E.R., Wasserman, A.L., & Kline, S.M. (2011). Associations among childhood abuse and psychopathy facets in male sexual offenders. *American Psychological Association*, 3(1), 66-75.
- Hanson, R.K., & Morton-Bourgon, K.E. (2005). The characteristics of persistent sexual offenders: A meta-analysis of recidivism studies. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 73(6), 1154-1163.
- Jespersen, A.F., Lalumiere, M.L., & Seto, M.C. (2009). Sexual abuse history among adult sex offenders and non-sex offenders: A meta-analysis. *Child Abuse & Neglect*, 33, 179-192.
- Kingston, D.A., Fedoroff, P., Firestone, P., Curry, S., & Bradford, J.M. (2008). Pornography use and sexual aggression: The impact of frequency and type of pornography use on recidivism

- among sexual offenders. *Aggressive Behavior*, 34, 341-351.
- Larochelle, S., Diguier, L., Laverdiere, O., & Greenman, P.S. (2011). Predictors of psychological treatment noncompletion among sexual offenders. *Clinical Psychology Review*, 31, 554-562.
- Maniglio, R. (2010). The role of deviant sexual fantasy in the etiopathogenesis of sexual homicide: A systematic review. *Aggression and Violent Behavior*, 15, 294-302.
- Maniglio, R. (2011). The role of childhood trauma, psychological problems, and coping in the development of deviant sexual fantasies in sexual offenders. *Clinical Psychology Review*, 31, 748-756.
- Maniglio, R. (2012). The role of parent-child bonding, attachment, and interpersonal problems in the development of deviant sexual fantasies in sexual offenders. *Trauma, Violence, & Abuse*, 13(2), 83-96.
- McCann, K., & Lussier, P. (2008). Antisociality, sexual deviance, and sexual reoffending in juvenile sex offenders: A meta-analytical investigation. *Youth Violence and Juvenile Justice*, 6(4), 363-385.
- Parks, G.A., & Bard, D.E. (2006). Risk factors for adolescent sex offender recidivism: Evaluation of predictive factors and comparison of three groups based upon victim type. *Sex Abuse*, 18, 319-342.
- 性犯罪者処遇プログラム研究会. (2006, March). 性犯罪者処遇プログラム研究会報告書. Retrieved October 25, 2012, from Ministry of Justice Website: <http://www.moj.go.jp/content/000002036.pdf>
- Seto, M.C., & Lalumiere, M.L. (2010). What is so special about male adolescent sexual offending? A review and test of explanations through meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 136(4), 526-575.
- Skovran, L.C., Huss, M.T., & Scalora, M.J. (2010). Sexual fantasies and sensation seeking among psychopathic sexual offenders. *Psychology, Crime & Law*, 16(7), 617-629.
- Whitater, D.J., Le, B., Hanson, R.K., Baker, C.K., McMahon, P.M., Ryan, G., et al. (2008). Risk factors for the perpetration of child sexual abuse: A review and meta-analysis. *Child Abuse & Neglect*, 32, 529-548.
- Wijk, A.V., Vermeiren, R., Loeber, R., T. Hart-Kerkhoffs, L., Doreleijers, T., & Bullens, R. (2006). Juvenile sex offenders compared to non-sex offenders: A review of the literature 1995-2005. *Trauma, Violence, & Abuse*, 7(4), 227-243.
- Williams, K.M., Cooper, B.S., Howell, T.M., Yuille, J. C., & Paulhus, D.L. (2009). Inferring sexually deviant behavior from corresponding fantasies: The role of personality and pornography consumption. *Criminal Justice and Behavior*, 36(2), 198-222.